田川校長のこと　～解説に代えて

若杉保久（暁星学園高等学校卒業生・会社役員）

私は、この十一月に暁星国際学園が創立三十周年を迎えると聞いて、お祝いの言葉を申し述べたいと心から思う者の一人である。

察しの良い方は、私が第二章に登場する「W君」であることに既にお気づきであるかもしれない。本文中で述べられているように、私は少年時代、「長崎中にその名をとどろかせた不良」であった。また昨今では、いわゆる個人情報というものの取り扱いがたいへんデリケートでもあり、ご配慮をいただいたのであろう。

私は四十五年前に田川校長に出合い、東京・九段の暁星学園で根気よくめんどうを見てもらうことがなければ、本当にその後も「不良」をつらぬき、その名を長崎どころか日本全国にとどろかせることになっていたかもしれない。

田川校長はよく「心の教育」という言葉を使われる。

暁星国際学園にかぎらず、キリスト教を背景に持つミッション・スクールというものに対しては、しばしば特別な精神世界のようなイメージが持たれがちである。学校説明会に出向き、そこで初めて校門近くにたたずむマリア像を目の当たりにし、また重い扉の向こうに広がる礼拝堂の空気に触れて多少のとまどいを覚えたというのは、よくある話である。

ご参考のために申し添えておくと、私自身はかつても今も、キリスト教徒ではない。だからこそ思うのであるが、本書を読んでおわかりいただけるように、田川校長の実践されてきた「心の教育」は実は特殊な考えや偏狭な精神世界に軸足を置いたものでもなんでもなく、むしろ国や時代を超えて、とても普遍的なものである。それはいってみれば、世の中の「先生」と呼ばれる人たちが「そういうことができれば、それは理想的なんだけれど、現実にそれは…」と誰もが避けてきた部分を実直に地道に、丁寧に実行されているにすぎないのではないかとさえ思えるときもある。

田川校長は、まず子ども一人ひとりに差をつけずに平等に接していた。勉強ができる子どもを特別扱いすることもなかった。勉強ができない子どもには頑張れよというし、できる子どもにはもっ

と頑張れよといっていた。子どものやる気をなくさせるようなことは絶対にいわなかった。
また、子どもたちにはたいへんきめ細かく接していた。昨日まで学校を休んでいた、父親を亡くしたなど、子どもたち一人ひとりの置かれている状況や気持ちのコンディションを把握して、子どもたちに声をかけていた。
いってみればそれだけのことであるが、これを心がけ、実行できる「先生」が、いまどれだけいるだろうか。
初めて教壇に立ったのが三十歳。昨今、大学を卒業してすぐに教員となれば二十三歳か二十四歳であるから、若き教師というにはやや遅咲きの感がある新米教師・田川茂は、子どもたちとの距離を縮める方法を教育学の理論書ではなく、子どもたちと実際に教室や校庭で接する中で伝わってくる感触の中に、手探りで求めていった。
そのことは、多感な時期を修道院ですごしはじめたという校長自身の生い立ちと関係があるのだろう。校長はよく、「信仰生活の中で、己に打ち克つ」ということをいっている。やはり普通の子どもと比べると、人一倍、自分と向き合い、自分と対話する時間の多い少年時代だったのだろう。そうした時間のうちに、やがて、自分だけではなくまわりの人間の心のありようも察することのできるアンテナのようなものが、彼の中で自然に育っていったのではないだろうか。

私が田川校長の教えを受けていて良かったと思う瞬間は、幾度ともなく訪れた。
なかでも思い出深いのは、今から十年ほど前に田川校長とともに九州に向かった折りのことである。とある用事のために校長に会った際、過日、長崎に車を運転して帰ったという話をしたところ、校長は、自分も自動車で九州へ行ってみたいと身を乗り出した。さすがに七十歳をまわる体にはこたえるのではないかと心配したが、どうしても、ということであったので、校長を後部座席にのせ、もう一人連れを伴っての九州行きの話を決めた。目的は旅行であるが、ついでに学園の宣伝のために、あちこちの塾をまわることにした。
私は出発前に校長に、くぎをさしておいた。
「あっちこっちの父兄に、九州に行くと電話をしないでくださいね。校長はえらいんやから、みんなが会いたい、会いたいといってきて、収拾がつかなくなるんですよ。今回は三人で旅行なんだから」
夜の八時に木更津を発ち、朝五時に広島に到着した。そこで一休みして、やがて九州に入り、下関、筑豊、福岡と回った。
福岡でその日の最後の用事を済ませると、校長が何かいいたそうなそぶりをしている。

「明日、どうなってる?」
「明日は、福岡から熊本に入りますよ」
と答えると、
「悪いけど、大牟田へ行ってくれないか」
という。
「校長、父兄ですか?」
「そうじゃないんだけど、どうしても僕に会いたいという人がいるんだよ」
仕方がないので校長のいうとおりに車を走らせると、一人のご婦人が、視界に入ったときにはもうすでに涙をぼろぼろこぼして泣いていた。
その瞬間、私は、校長は見えないところでこういう人たちにも心を向けていたのだな、と深く感じ入った。子どもたちばかりではなく、その父兄もみんな田川校長に心を開いていた。
そのご婦人は大牟田の耳鼻科のお医者さんであった。息子さんが暁星国際学園から聖マリアナ大学に入ったものの、留年を繰り返していて、校長は、母親であるそのご婦人に何度も手紙を書いて勇気づけたのだという。
学校にいる子どもたちだけではない。自分のまわりの人、すべての人に自分の心を向けて相手の心を開き、人々にやさしさや情熱を吹き込むのが、田川校長の「心の教育」である。この本には「心の一貫教育」という題がつけられているが、校長にとって「一貫」とは自分のまわりのあらゆる人々のことをいっているのかもしれない。

田川校長を見ていると、この人は教育者であると同時に事業家だな、と思うことがある。
校長は五十歳のときに、学校をつくるというとてつもなく大きな事業を立ち上げた。五十歳といえば、確かに「教師」、とりわけ「校長」として見れば、もうそこから何か大きな動きや賭けに出たりするイメージは持ちにくい。しかし、一人の「事業家」としては、十二分に積んだ経験をもとに、まだまだ一旗あげる勢いを秘めているのが五十歳なのかもしれない。
校長はすでに東京・九段の暁星学園時代に、実にいろいろなものを意欲的に建てている。一九六〇年（昭和三十五年）に小・中・高校の校長に、またその翌年に学園の理事長に就任して以来、講堂の改装、高校校舎の暖房設備の工事、グラウンドの整備、そして大磯校外学舎や那須校外学舎の建設、そして約三万坪の校地購入などを実現している。一九六七年（昭和四十二年）には暁星学園国際部日仏科を創設し、その校舎や寄宿舎の新築工事を行っているのである。
事業というと、一般には利益の追求を目的とするものだが、もとより校長にそうした経済的野心

があるはずもない。当時の記録の中に、校長の教育に対する理念や、一連の「事業」に対する考え方がよく現れているので、紹介してみたい。

私どもがつねに希望することは、よりよき暁星をつくりあげることであります。先輩がつくりあげた暁星、その暁星の特長を保存し、よりよきものに成長させることであります。いかなる方法がこの理想を実現させるか、実際的で、具体的で、かつ近代的な方法を考えて、勇気をもって実行していきたいと思います。

現代の社会の状況を洞察してみますと、物質文明の進んだこの世のなか、科学万能主義の立場を排して、各個人の人格を養成し、真の幸福をもたらし、社会に平和の使徒としての使命を果たしうる青年を送り出したいものであります。

フランス大革命のさなか、マリア会の創立者シャミナード師は、青少年を教育することによって、久遠の真理を注入し、世の人びとのリーダーをつくりあげてフランス全土の再興を考えたのでした。われわれも、平々凡々な人間ではなく、磨きぬかれた精鋭をおくりこみ、日本の社会の浄化に協力したいのです。

日進月歩の成長をとげる科学技術は、今日その頂点にあると思われます。しかしはたして、

物質文明の発展のなかで、すべての人間が求める幸福を手中におさめているのでしょうか。いや、人類はむしろ、かつてない不安と恐怖にさらされているのではないでしょうか。

この原因がいずこにあるか、人間の物質文明の進歩と、精神文化の不均衡に、その原因のひとつがあるのかもしれません。物質文明のにない手である人間の正しい形成、人格の養成がなければ、これからさきも人間は同じ誤謬をつねにおかしていくかもわかりません。（中略）

われわれが一意専心、教育に従事するのは、青少年の精神浄化にとって学校教育がもっとも実りゆたかな方法であり、人格形成のための最良の手段であると信ずるからであります。

しかし、勉学に努力し、刻苦精励、学習につとめるのも、それ自体が目的なのではなく、よりよき人間をつくりあげる手段であることを忘れてはなりません。そのために環境の整備を行い、教育の主体と客体である教職員と生徒の選出を実行して、暁星の特長である家庭的雰囲気のなかに、近代的な適用を実現することを忘れず、また、努力することを忘れないようにしたいと思うのであります。（後略）

（『暁星』復刊8号所収「暁星の教育」。『暁星百年史』より引用）

しかし、いくらある程度の規模の事業実績がすでにあるといっても、新たに場所をさがして学校

をつくるというのは、桁がいくつか違ってくる話である。並たいていのことではない。なによりまず、いろいろな事情により、自力で十億円を集めるところからのスタートである。

いまでこそ、田川会という後援会の組織があるが、当初はけっして大きなブレーンが存在していたわけではなかった。ほどなく校長の呼びかけに応じてそうそうたる顔ぶれの募金委員会が結成され、各方面に寄付や協力の要請が行われたが、そこで校長は手紙や文書でお願いをするだけではなく、そうして糸がつながった相手のところを一つずつ順番に回り、直接相手の顔を見ながらお願いをした。

実際に校長と面会をした人の中には、「かの『暁星』の理事長」というにはいささか質素な印象の校長の出で立ちにとまどった向きもあったかもしれない。二十年、三十年と着古したシャツを着て、当時すでに四十年使っているというぼろぼろのカバンを持って、校長は個人や企業や役所を一件一件まわったのである。

私は校長が贅沢をするのを見たことがない。私立学校の校長、理事長といえば、シャンデリアの下がる瀟洒な邸宅でも構えていそうなイメージを持たれるが、田川校長にかぎっていえば、質素倹約を絵に描いたような人である。本文にも書かれているが、若いときは修道院に住み、現在は学園

教師であると同時にカトリックの神父である校長は、日々のお祈りを大切な日課としておられる。

の管理棟という建物の一室に慎ましやかに居をかまえている。
田川校長は、かつて九段の暁星学園の校長になったときから、報酬は生活のための最低限の金額を受け取るにとどめていた。暁星国際学園に移ってからも、経理の担当者が
「ほかの教職員との兼ね合いもあるので、このくらいが妥当で」
と給与の金額を提示したところ、校長は、
「これでは高すぎる。学校のために多くの方のご協力をいただいているのだから、所得税をよけいに払ってまで、高い報酬を受け取るようなことをしては、みなさんに申し訳がない」
といって、大幅に下げさせたという。
おまけに、校長は交際費というものをいっさい使わず、出張費はもちろん、子どもたちに与えるお菓子などの分も自分の給料で精算することにしているため、実際の給与支給の日には支給できる分がいくらもなかったという話を聞いたことがある。

学校設立当時のことに話をもどすと、暁星学園に子どもを通わせた父兄や教職員にも賛同した人たちがいたし、暁星学園出身の政治家や文化人などもたくさんいて、それなりのコネクションを得ることもできた。しかし、さきほどお話ししたように、校長は人づてや、郵送した文書によるお願

いですませるということをしなかった。ことごとく直接自分が相手のところへ赴いていって設立の趣旨を話し、頭を下げたのである。
門前払い同然のこともあったらしい。それでも田川校長の信念はやがて関係者からその周辺のたくさんの人たちの中にも響きわたっていった。
人間は、滅多なことでは金を出さない。ましてやその学校に入れようと思う子どもがいない、関係のない人間が出すはずがない。しかし、十億は集まった。
一人の男が信念として教育に魂を捧げようとしている、その真意が伝わったのである。

私は、いまも木更津の暁星国際学園に車を走らせる折り、三十数年前に校長を車にのせて、どこに学校を建てようかと、房総半島のあちこちを走り回った日々のことを思い出す。
学校を建てるにあたっては、現地でちょっとした反対運動が起こった。地元の私立の学校の理事長が先頭に立って、猛反対を唱えたのである。千葉県は首都圏とはいえ、東京に近いあたりに比べれば木更津はまだまだのどかな地域であって、子どももたくさんいるわけではない。つまり、新しい学校など建とうものなら、客をとられてしまう事態になりかねないのである。
先方は、強硬に学校建設反対を叫び、譲らない。田川校長は敵陣へ乗り込み、

「帰国子女を対象とする学校だから」
と相手を説き伏せて、地元からは学生を募集しないことを約束して、先方に戈をおさめさせた。
ところが、思わぬ事態からこの約束は白紙に戻された。どうしたわけか、敵の校長のお孫さんが暁星国際学園への入学を強く希望してきたのである。
このあたりの経緯についてはつまびらかではないが、かの校長とは、いまではすっかり茶飲み友達として互いに行き来し、世間話から互いの学校の経営にいたるまで、胸襟を開いて話のできる間柄になっていると聞いている。

本文でも触れられているように、田川校長は、学校という組織の論理ではどうすることもできない事態に遭遇して、自分の中でどうにも手詰まりになったときに私の携帯電話を鳴らすことがある。
かけつけて一仕事終え、校長室で差し向かいに腰を降ろすと、校長がどばどばとブランデーを加えてくれたコーヒーをはさんで、ひとしきり世間話になる。
本文の中では受験に重きを置いた教育を悪し様にいっているが、桜の時期には、今年はうちの高校からどこどこの大学に何人入った、あそこの大学には何人しか入らなかった、とつぶやいているときもあるのである。

窓から外を見ると、森の闇の中に中学・高校の建物がうっすらと浮かび上がり、遠くに寮の明かりが見える。本当にたくさんの人たちの協力があって、この学校はできた。しかし、田川茂でなければ、ほかの誰であっても、この学校はできなかった。それは、関係者の誰もが認めるところである。

私は、いまでも校長のまわりの人間の中では一番態度が悪く、時にはけんかのような物のいい方になってしまうこともある。そんなときでも校長は、コーヒーの湯気の向こうでにこにこしながら
「『老いたら子にしたがえ』というからなあ」
と目を細めている。
その笑顔は、
「いまでも、けんかは強そうだな」
といっているようでもある。